

片山 享編

新古今和歌集注

高松宮本

古典文庫

片山 享編

新古今和歌集注

高松宮本

古典文庫

昭和六十二年二月二十日印刷発行

非売品

編者 片山 享

発行者 吉田 幸一

印刷者 白橋印刷所

新古今和歌集註

高松宮本

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

目次

凡例	五
新古今和歌集註 高松宮本 上	七
新古今和歌集註 高松宮本 下	一四三

新古今和歌集註

高松宮本

凡例

一 本書は、高松宮御蔵『新古今和歌集註』の歌注を翻刻したものである。翻刻に際しては次の方針によった。

1 底本の注を有する歌の作者名・和歌・注文のみを翻刻し、詞書については注を有するものに限定して翻刻した。

2 底本の錯簡を正し、欠脱した個所を吉田幸一氏蔵『新古今和歌集註』で補い、枠で囲んで示した。

3 漢字・仮名の別や仮名遣い等はすべて底本のままとしたが、漢字の字体はおおむね通行字体に改めた。

4 吉田幸一氏蔵本で校合し、底本の本文の誤脱を補う場合のみ、底本の当該個所に黒点を施し、括弧内に校異を記した。従って黒点がなくて括弧内に記入があるものは校合本のみにある本文である。

5 各歌頭に新編国歌大観の歌番号を記した。

二 本書の解説は、「新古今集聞書」（牧野文庫本）解説と共に、同書の翻刻のあとに記した。

三 本書の翻刻をお許しくださった高松宮、および宮内庁書陵部関係者各位、また校合をお許し頂いた吉田幸一氏に深謝申しあげる。

昭和六十一年十二月二十一日

片山 享

新古今和歌集註

上

新古今和歌集卷第一

春哥上

摂政太政大臣

一 みよし野は山もかすみて白雪のふりにしさとに春は来にけり

此歌を一部の巻頭にをける心はこの一首のうちに題号の心をふくめり、初の五文字よりふりにし里といふまては古今の心也、春はきにけり新の字の心也、哥の心は吉野山は深山なから春のいたれる験に霞たな引也、されとも深山なれば雪もふる也、吉野は昔宮古也、されは白雪のふりにし里とつゝけて読り、此哥正直にして王道にかなへり、余情限なし、大かた筆にのへかたきものをや

太上天皇

二 ほのくとはるこそ空にきにけらし天のかく山霞たなひく

此御哥は初の五文字を下の句のかしらにをきてみるへし、天のかく山は伊勢の国

にあり、天の戸の明初しも此山よりの事なれば春の始の御哥にのせられたる也

式子内親王

三 山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえくかゝる雪のたま水

山家早春の心也、玉水とは雪消て落る雫をいふ也、深雪にて春ともしらぬを雪の玉水にて春を知ると也

宮内卿

四 かきくらしなをふるさとの雪の内に跡こそみえね春はきにけり

跡とは人跡の事也、春のあとにはあらず、雪の内に人の跡こそ見えね春はきにけり也、とふ人のなき宿なれとくる春は八重むくらにもさはらさりけり

皇太后宮大夫俊成

五 けふといへはもろこしまてもゆく春を都にのみと思ひける哉

もろこしまてもとは春のあまなくいたるをいへり、しかるを都はかりと思ふは心せはき事そと也

俊恵法師

六 春といへは霞にけりなきのふまで波まに見えし淡ち嶋山

昨日までは波まに見えしあはち嶋山も今朝は春のしるしにかすみてほのかなると也、源氏すまのまきにたゝめのまへにみやらるゝはあはち嶋なりとあり、朝夕にみれはこそあれ住吉の浪間きしのむかひの一本にみゆるあはちしま山

西行法師

七 岩間とちし氷も今朝はとけそめて苔の下水道もとむらむ

道もとむらんとは岩間を閉し氷解初て流るを云也、大河などのひろき水ならばすくになかれて道はもとむましきと也

よみ人しらす

八 風ませに雪はふりつゝしかすかに霞たな引はるはきにけり

風ませとは雪にましりて吹かせなるへし、しかすかはさすかにと云言也

九 ときはいま春にはなりぬとみ雪ふるとをき山へにかすみたなひく

此哥は時は今春になりぬと読きりて遠き山へに霞たなひくといふ句にかけて見るへし

権中納言国信

一〇 春日野の下もえわたる草のうへにつれなくみゆる春の淡雪

淡雪とは淡のやうなる雪なり、消やすき雪をいへり、しかるをつれなくみゆるといふことは下もえの若草のうへなれば淡雪をもつれなしとよめり、みゆると侍れはしかとつれなしといふにはかはるへし、又説、つれなくと云に二の心有、一二は心つよき事也、一にはたくひなき事をいへり、此哥もわかくさのうへに淡雪のふりかゝるはたくひなく面白くみゆるよし也

山辺赤人

一一 あすからは若菜つまむとしめし野に昨日もけふも雪はふりつゝ、しめし野とは領したる事也、あすからとは毎日つまんと云心也、昨日もけふもといふにて心得へし、さしあてゝあすつまむといひさためたるにはあらさるへし

前参議教長

一二 わかなつむ袖とそみゆるかすかのゝ飛火の野への雪のむらきえ
とふ火野とは春日野の内にあり、昔烽火たてられる跡也と也

紀貫之

一四 行てみぬ人もしのへと春のゝのかたみにつめるわかなゝりけり
かたみとは花なとつみ入る籠をいふ也、春のゝのわすれかたみによそへて読り、
忍へとは思ひやれの心也

皇太后宮大夫俊成

一五 沢に生る若なゝらねといたつらに年をつむにそ袖はぬれける
年をつむとは年をふる也、かれをわかなつむによそへよめり

藤原家隆朝臣

一七 谷川のうちいつる波も声たてつうくひすさそへ春の山かせ

古今の哥二首を引合てよむ哥也、谷風にとくる氷のひまことにうちいつる波や春
の初花、花のかを風のたよりにたくへてそ驚さそふしるへにはやる、谷川の氷も
はやとけて声をたて侍れは驚をもさそへとはるの山風にいひかけたる哥也

一八 春きては花とも見よとかた岡の松のうは葉に淡雪そふる

かた岡はちいさき岡をいへり、春きては花とも見よとは冬は雪を賞する物也、春

はまた花を賞する物なれば春は花とも見よと松の雪を賞してよめり、又説、冬は雪のときにあふ世也、春は花のときに逢世也、されは春になりては雪は時にあはざる物なればときにあふ花とも見よと読るといへり

中納言家持

三〇 卷向の檜原もいまくもらねは小松か原にあは雪そふる

まきもくのひはら大和の名所也、此哥に春の詞なし、いまくもらぬと云を霞の心によめる也、余寒の躰也、又まきもくとはまことの木と云(書)也、檜木はよき木なれば卷向の檜原とは云也

讀ひとしらす

三一 今さらに雪ふらめやもかけろふのもゆる春日となりにしものを

雪ふらめやもとは雪や降へきととかめたる詞也、かけろふと云に両説あり、一にはとんはうといふ虫也、又糸遊なとてみれば空にちら／＼とみゆるをも云也、陽煙と云也、両説何もよし、此哥はもゆる春日とあれは陽煙の事也、さてもゆる春日と成にし物を今更に雪はふらしと思へは雪の降よとよめり